



着ぶくれて過去も未来ももう要らぬ
 国見敏子
 霾天へ出船の汽笛長きかな
 堤保徳
 尾びれなき鮪の顔の鍼力めき
 我妻民雄
 大潮の佃小橋や紙鳶いかのぼり
 宮岡光子
 着膨れてすつからかんの吾が詩囊
 野口美智子
 干戈停めよ島梟の吊まなこ
 許勢元貞
 陶房の春のストーブ芽のかたち
 上村敦子
 水葬の鯨を放つバージ船
 篠遠早紀
 湯豆腐や君にワルシャワ労働歌
 島田謙吉
 裸木の星に磨かれをるごとし
 小林富久江
 立春や海のキリンの背比べ
 山田寿子
 一月の蠅虎や飢ゑるたり
 宮坂やよい
 *
 毛馬内まうないや熊の膏あぶらは春の使者
 山田一政
 避難所の天水桶に初氷
 幹自聲
 初市や店主の顔も縁起物
 水野星闇

国見敏子
 堤保徳
 我妻民雄
 宮岡光子
 野口美智子
 許勢元貞
 上村敦子
 篠遠早紀
 島田謙吉
 小林富久江
 山田寿子
 宮坂やよい
 *
 山田一政
 幹自聲
 水野星闇

戸隠の深き轍や烏呼からす
 原田宏子
 出初式でんでん太鼓売られけり
 伊藤木公
 冬ぬくし句友は同じ珠たまを抱く
 松井弓
 雪池にバケツ置きある鍛冶の家
 坂田寿美
 仏頭のガンダラーなる春愁
 関禮
 山の三月むずむずざわざわばちん
 木村由里子
 一輪の蠟梅家中機嫌よき
 保坂季泉
 左義長や隣に義援金の箱
 飯塚えり子
 気がつけば正座の吾や椿餅
 内堀紀香子
 舟戎旧正餅を供へあり
 垣内みか
 舅好みし酒粕買ひに煮菜いなしなの日
 渡辺真帆
 春近し跳んでみようかもう一度
 内藤妙
 一里一尺玄々と千曲川
 依田ひろ
 馬の眸の黒きに光初弥撒へ
 平山宏子
 寒天日和権現岳の大男
 伊藤美恵

原田宏子
 伊藤木公
 松井弓
 坂田寿美
 関禮
 木村由里子
 保坂季泉
 飯塚えり子
 内堀紀香子
 垣内みか
 渡辺真帆
 内藤妙
 依田ひろ
 平山宏子
 伊藤美恵

巻頭寸言 花巻であり、能登である。十勝であり、那覇である。地貌というと、黒い土が見える。触れる感じがにわかには蘇る。風土という格好いい呼び方がぐっと身近に引き付けられる。大きく区分された言い方よりも、わが住む地という、そこに、おのずから死生のいのちの問題がにじみ出てくる。なつかしさがある。俳句表現で一番大事なところである。

五月に『俳句表現 作者と風土・地貌を楽しむ』を平凡社から出してもらう。『俳句必携1000句を楽しむ』『俳句鑑賞1200句を楽しむ』『一楽しむ』シリーズの第三弾。俳句表現の核心、作者の「いのちの煌めき」はいかに「風土・地貌」と深く関わるのか、長年考えてきたところをやさしく端的にまとめたもの。お読みいただければありがたい。

過去も未来も要らないという——洗いざらしの表現

着ぶくれて過去も未来ももう要らぬ 国見 敏子
もうできないと言ってきた。できているではないかと言いつ返す。先月に続いて同じ作者のぎりぎりの作品を掲げた。〈ちよつと吸ひふうと吐く息今朝の冬〉という句も同時にある。酸素ボンベを離せないらしい。長年小諸に国見敏子ありと、知る人は知る、きわめてすぐれた俳人である。私とは同い年、六十年近い親交がある。鋭い。ぐいぐい突く。生きる

ない。開き直ろう。ここから吾が心の底を見据えて出発だ。根は明るい作者。くよくよしていない。博多っ子。
干戈停めよ島嶼の吊まなこ 許勢 元貞
知恵のある島嶼。鋭い吊り目で訴えるのは「戦をやめよ」。人間どもは愚。愚かの塊。この地球は人間だけのものではない。破壊したらもう元には戻らない。目覚めよ人間よ。ガリガリの欲の塊をぶち壊せ。

陶房の春のストープ芽のかたち 上村 敦子
明るいお洒落な陶房。萌え上がる芽の形のストープとは想像するだけでもわくわく。いよいよ春へ。さりげなく上向き。
水葬の鯨を放つバージ船 篠遠 早紀
東京湾内に漂着した鯨の死骸を湾外へ出し深海へ沈めたと
いうニュースを耳にしたことがある。バージ船は連絡船の類。

今月の秀句

尾びれなき鮪の顔の鍼力めき 我妻 民雄
うまいことをいうものだ。私も長年詠いたいと気になりながら、「鍼力めき」が出てこなかった。尾びれが切られ、市場に出された、鮪の顔のべかべかな鍼力の艶。切れるような、それでいてどこかつくりものめいた哀しさ。ああ鮪。鮪は死しているが、句は訴える迫力がある。表現された巧みさをいかに評価したものか。ともかく秀作である。

人間力を扶るような力があり、だれも真似ができない。「岳」ばかりではない、日本の俳句界の貴重なまともな俳人、いや財産である。一日でも、一時間でもこの世の息を吸ってほしい。句集『序幕』（平成元年・岳俳句会）、『幕間』（平成二十四年・文学の森）は渾身の業績だ。

露天へ出船の汽笛長きかな 堤 保徳
ユーラシア大陸からの黄土が日本列島に降る。いま、埠頭を出港する船の汽笛が響く。どこへ行く船か。いま世界は乱脈極まりない戦場を抱え、青息吐息。一日も早い戦争終結を祈るのみ。作者は戦争への抗議の汽笛と聞いたものか。

大潮の佃小橋や紙鳶 宮岡 光子
正月風景に郷愁がある。佃島に潮が満ちている。佃小橋から仰ぐ海上の風。佃の子が揚げている凧に、今の時間を超えた遊びがある。作者はそこに童心を感じたものか。小学校の先生の眼が捉えた地貌の純粹さ。スマホに振り回される世界ではない。自然のみずみずしい空気が息づいている。

着られてすつからかんの吾が詩囊 野口美智子
自己省察が鋭い。冬は出発かない。わんさと着込んで、ぬくぬくと目をつぶるばかり。広がる世界はグレイ。水気が足りない。空気が淀んでいる。はっと目覚める気持ちの働きの

表現されるとそれまでであるが、珍しい句材である。句材を広げる努力も俳句世界の話題を豊富にする上から大事である。
湯豆腐や君にワルシヤワ労働歌 島田 謙吉
労働運動の闘士も共に老いて、湯豆腐を突きながら、「ワルシヤワ労働歌」を懐かしむ。一九〇五〜七年、ロシア第一革命の時にロシア統治下のポーランドで歌われた共産主義運動の労働歌である。現今の権力国家ロシアを見ると、隔世の感がある。鹿地亘の訳詩を見たことがあり、妙な新鮮さがある。

裸木の星に磨かれをることし 小林富久江
清冽な詩情に惹かれる。星の光が裸木を磨くとは美しい。
立春や海のキリンの背比べ 山田 寿子
海辺に立つキリン風景。眼前には立春の海原。並ぶキリンとは、コンテナを荷下ろしするクレーンのこと。さまざまな背丈が楽しいではないか。

一月の蠅虎や飢ゑるたり 宮坂やよい
中島敦流に凝った我慢の「一月の蠅虎」が面白い。
初春の軽さ・明るさ——「店主の顔も縁起物」

初市や店主の顔も縁起物 水野 星閣
俳諧の俚諺や俗謡を踏まえた自在な軽い遊びの句。とりわけ注目し推奨するのではないが、川柳まがいの句で、調子がいい。深遠な難しい俳句ではないが、からかい半分のこんな

句も楽しいではないか。俳句自在の世界である。

避難所の 天水桶に 初氷 幹 自聲
射水市在住の作者にとり、能登大地震の光景を思い浮かべたものか。水はいのち。些細なことに全身の神経が閃く。

戸隠の 深き 轍や 鳥呼 原田 宏子
正月の初山入りは、柚人には一年の大事な行事。それを「鳥呼」と称し、鳥に供物を与えて一年の吉凶を占うという。私は美見したことがないが、この呼称に興味をもった。戸隠には二月九日に、戸隠中社に隣接した山の神を祀る祭がある。
出初式でんでん太鼓売られけり 伊藤 木公
いかにも飛騨高山の賑わいと、うれしくなった。住斗南子さんの逝去後もう一つ活気がほしい高山にとり、この作者は

今月の秀句

毛馬内や熊の膏は春の使者 山田 一政
いかにも秋田の地を踏まえた作品である。「毛馬内」は秋田県鹿角市十和田毛馬内。和井内貞行や内藤湖南の出身地である。「熊の膏」は縄文以来の重宝な万能薬。自然からの賜りもの。作者によると、「出羽の人々にとつては待ちに待った春の使者」とか。がっちり地の生活感を表現され、読み手はああと感心するばかり。長い長いがっしりした歴史がある。「毛馬内」「熊の膏」「春の使者」の句材も表現もがっちりスクラムを組んで迫る。

左義長や隣に義援金の箱 飯塚えり子

どんど焼の場にも、能登大地震の義援金の箱がある。気づきのところで、わが身が辛い思いをした場合を考えましようと呼びかける。人情は左義長の地貌から生まれる。爽やか。

気がつけば正座の吾や椿餅 内堀紀香子

椿餅を前に正座をしている吾に気づいたというのである。作者との交流も長い。初めて紀香子に出会ったのは一九六一(昭和三十六)年四月、小諸高校であった。作者は高校生。亡き佐藤詔子が親友。私は国語教師二年目。名のごとく匂うばかりの乙女。浅間山麓の石峠の家から通っていた。父は詩人の龍野咲人。咲人先生にはお世話になった。掲句からは父を前に座っている俤が浮かぶ。子煩悩な父。詩人の常として母に苦勞をかけた父。早々に亡くなり、無性に懐かしい父。

舟戎旧正餅を供へあり 垣内 みか

作者の居住地、四国四万十の舟戎。戎信仰が盛んな西国だけに、旧正月の餅が供えてある光景にえべっさまのにこやかな顔が浮かぶ。西国地域は海よりの信仰が深い。

剪好みし酒粕買ひに煮菜の日 渡辺 真帆

「煮菜の日」は二月七日。古くなり味が落ちてくる野沢菜を煮て食べる。新潟や長野では春先、野沢菜に砂糖や醤油を注いで煮て食べる。珍しい地域の季語に注目した。

春近し跳んでみようかもう一度 内藤 妙

決意だけが空回りしないように、気合い入れに推薦した。

じめ優れた作者を擁する同地への期待は大きい。出初式と「でんでん太鼓」を打ち鳴らす気合はびったりである。

冬ぬくし句友は同じ珠を抱く 松井 弓
うまいことをいう。(句を玉と暖めてをる炬燵かな)(高浜虚子・「六百句」ではないが、俳句の友達は心許せる最高の友になれよう。信ずれば気持ちは大らかである。

雪池にバケツ置きある鍛冶の家 坂田 寿美
雪国には屋根雪などの雪解水を貯蔵する「雪池」がある。鍛冶の家であれば、常に水も入用だ。雪池の傍らにバケツがおかれていることへの素朴な着眼に納得した。

仏頭のガンダーラなる春愁 関 禮

中村哲さんが赴任したパキスタン北西ガンダーラ。その地はギリシャ美術の影響を受け、紀元前に仏教美術が花開いた地。その「仏頭」を見て、思いにふける。「春愁」はすこぶ複雑な季語であるが、掲句を一読、詳しいわけは承知しないが、スツと納得できた。不思議なまとまりがある。

山の三月むずむずざわざわばちん 木村由里子

山の三月を擬音により耳で捉える。生き物の胎動が始まる。「むずむずざわざわ」、用意はいいか、いくぞ「ばちん」。期待が渦巻く人心を、鄙びたことばの蠢きで見事に捉えた。

一輪の蠟梅家中機嫌よき 保坂 季泉

蠟梅の匂いは格別。一輪あれば家中におう。幸せ満ちる。早春の花は海の彼方から岬を廻ってよき機嫌を運んでくる。

自分が変わる。それほど根気がいる仕事はない。ひたすら地味に未来への期待に賭ける。春はいまである。

一里一尺玄々と千曲川 依田 ひろ

深雪のさなか、北へ一里(四キロ)進むと一尺(三十センチ)雪が深くなるという。中野飯山以北の俚諺だ。その中を黒々と奥深い千曲川が流れる。善光寺平を抜けると千曲は山峡に入り、川幅を狭め、水深が深くなる。「玄々」は奥底知れない深雪の千曲川の形容として、厳肅である。

馬の眸の黒きに光初弥撒へ 平山 広子

聡明な馬の眸から光を感じたクリスチャンの作者の初弥撒に向かう清潔感が伝わる。過剰な表現がないのがいい。

寒天日和権現岳の大男 伊藤 美恵

一読、雪形かなと想像した。が、寒天製造の最盛期はいまだ雪形の時期ではない。これは作者の幻想だろう。八ヶ岳の権現岳は二七一五メートル。真冬そこに大男がわっと出現したら、「ゴジラ」の再現かと面白い。自由な作者。気ままな作者。

他に推薦候補作をあげる。

- ダイヤモンドダスト静か神祈る 大澤 淳基
- 探梅や裾廻の光耀へり 石川 定雄
- 寒明や水平線はなほ綱 中澤 良子
- 水かきをむしりて父のひとり酒 西牧千恵子
- 吊したる腹はぼつてり鱈まつり 千葉 任子
- 年新た石垣りんの詩を掲ぐ 本園 明男